今源氏 二

へ遠13
1614
2

1614
2

今源氏宣紙

同孫

一 氣とうの巻

二之巻

奇羅奴のあらけ切紙
ひそに類城屋四十八ろく
うるに生鶴のねをうる

二 こがね浮船

中京にあひみちや牢獄
歎によばれとの牡丹籠にて
あはれしみをつけてこぼさ
れ

三 情に身をつくし

振袖ある年こん〳〵濡
金の尾はなれつき世帯のふう
下りの思ひに三味線の
気がかはり
や

今源氏空船　　二之巻

一 気をうりせと

去法は去されや里家の山くみとめき。こやこ人の
しくさ法玉ち宴よのかり。祇園清水の屋
寺にましまうさせ。手拍子うてとぬりし。三味線の
京よ耳をそだ立。素草文ぶりのあさひらし紀
と申そてよ。りりを増るも古今新風つが芝居。
生滝新五郎が二乃新うりといせいがしかる里れ
それだ木戸をおてかる事りかとばとげすひ射
のさうじ三郎づきまへ通ちいのわふせんをき
りせてらいし申方のおもとま龍八丈よもつらんどの

うち。中に白しくてすこしくとがりけるを
ものしり。やがて白沢もそのたぐひ。いとど
よ法を用ゐるものを仕立て女とんへしをふる
つもつて。三義三郎おもりさうでうまわりをあを
今やくまり西へ。軍平を本をを出。子世話を
ささこう仕りのゆりこ数十人どりとさうでうさよ
入れだ。おとまいを祖母ぶり。ぶ出めう
ぐふのまる仕合。近付つぐをたうでまんぶ紀伊
なぐうるめとぐらよるくやうびるよ酒をつ
し。焼金のはを知つけだ。法をまを仕らつる
ぐを。色いていねいるこうらくさうだ一いとぶるこ

ゆくへ後りる間。ぶにと役所出来あく。板今月仕
まれ相云の郎影ハ
けいせい富士見る里三義続一花源表六 生駒新ろう
英二美ぐせいい一宮一命 一梅のやすど六 中村ぶこめう
付りおのくこうひて八百本年表 一本うるる分 坂田新ろ分
上ひとり家れ女帯 梅ひとびと 一わげやまぶ 百今新ろう
中林ごめ林ろこの柏 梅ひとびと 一女房 坂田大二ろう
下ろひてのうれと 坂ひとびと 一ろい世大とと 豊浜女帯
役人碧名の浜男 一日ろ坂川 上村ろ分
一民ぶれ美ゆ村ろ ゆ川ゆく亜 一日うと雲 ゆ十鶴亜
一日ろけ 坂田市郎 一つるゆ美浜ろ 美林ぶめろ

一あるとき姫　淺尾十郎　一世だいこうの　殿様殿
一いのふさとう姫　尾上うこん　一中仲蔵つ　三笠淺右
一伯父丹右衛門　ちう山伴十郎　一あわら　ゑこ若狭
一家老のゑの若ごゑ　勝間九郎　三和殿人あまこうさ
一同子平蔵　小姓　八宇源次　侍うまん
中のちゑ　ちりよう生駒新五郎　ちゑせんがこよ大小こう。
小性のうまるこ　成さ人　佐野ひまづうちやうらんさげ。
方ぐさ　ゑ　ひ。いて名付　ちこうひあやうこと　ちゑび
まこひまり。うこ門のかりよやとこ。ゑくこと
ちりこく　称めいとれ出し。むこりゆうはあしや。
称むこいい　死深表出して。ゑのあるこる

が。むこうとて　ちいせい大ちこよりこうれ。剣
ちゑ女房ひとそつ　とびかる淺すいすこと　ちること
ゑ　ちりゑせるこびか。雅をうこ雅をこんやう
ちゑ。あてちこ　旅のうこ命。ちゑ日書しまま
づ今日ちいあこうちうこ。ひりこいかこ　ちる男の
ちてちのんと。ゑとこ車いこせりふ。ちぜんと一ゑ
ゑ。人神よ　絵ちりこりふちゑ大やこ。こ
つまこ　ちりこ今ひれ歩の丹前　役者。七三郎と
粉の男。ちめこる女中いびゑ　ちあんな男ご。名ち
いこ。こ合ちう新こと。ちん鶴ごこをちる。お
ちゑ　ちこうこりふの。銀めこうどこちとち

あのうつくしい
ふうぢんぶ
ふくしまやうぢ
ふくしまやうぢ
里

つめ。時〳〵いの髪よりとぢをとらしめる時いこうとひ
ねりぢをゝ引。鼻息もせずゝ〳〵まことおんな
ものゝうめをとる分がりつさとゞ田舎侍とそこん
分而よくさとをたうど。おとなまいこゝろくでもあるこゝろ。
物いとびとうつび。時〳〵くいこづいとせりくんあり
亀ちとしよ酒きつのまれこさゝるをあいこゝろ
へさ計程めたるなさび。こんなおゝろいせりふき
うひで。程云のまけがきぬせぬまじ侍そこん
せこおゝいせりかの下で酒をこゝろ〳〵おがこゝも
こゝろうゝ而でもあいこゝろよこがめらまこゝりこゝ
ひゝうゝめや。ぬゝうぬ新しそ。あゝまこゝ而でゝくいふ

酒かござる。アノおゝいい下でおうひやうひこゝろいこゝ
一の名人ナア中云れこゝおをこびゝこれかるめいこ
く。お情ゞうゝ忘まこゝりてひざがひがむりく
いよぞらこのこゝめへこゝて間中へるゝ。おゝやあつ
うゝ人ゞこいこんこゝこゝろ口よ我こゝまをあてサヤ寝
でお吸酒中づ出酒こゝいこ。我ものむこゝよあるすん
軍事をおゝやこゝへお出入のいこゝや。天河忍宅つけ
込。今和藤富へ出こんこん舞中而よ。びこ茶屋へ出出の
ゝこゝいこゝいこゝ。出治こゝこゝいこゝん作りぬゝ。
子細ゝくいこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ。お寝
ゞゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

だのまびだ又いりとごせん。私の出地をよい子位
成をうりまし。出船を付よ仕ん。色ハ一奥雅り色ま
しに演尾十二ら雪浪子書。色後でい物屋つう
源氏を暫入らう来りね。おとまハ色つぎよへるよ
やうよい西へ出ろうれまして。おあれへのはらそう。れ
ぬハ代系書でろ。をまうんちうとんべご遊めるを
生鶴屋ハうれぬうとへだ。これだ新ろう屋ハ色を
来春よのがう色。余日ろう放来ら近付よしゆう
ねだ。ふうくとハやがて北。はうつうれ用いう使たは
らんとなる子ふしび初対面ながらおあいういとい
うう。ゆがうよござりましたと。面をはてん答ひて

出ようとめひしやうう酒とうてめうちわひいおうう夜
代脚ハち沢夏よううとわひハ半ち和ひ。ひとりうハ
うりまふうりとるあ用。あいうあ色の方敵いざゆん
と考ごらへどるがやはそろうちうタめ。わがて
おゆうとがじろうよ見抱ろ。きぐの西地色ん宅と
いざとうそつま。下地ハちうりはうこうり。ちもく
ことせうち敵ハ。ゆうりあいてもうるがの。二階ざて
うて引しやこのおうと
三 こがゆく源氏母
美河見宅ハ伏義祇園一百二十代のうちゆん。ふ
子ふ者妻第妻多別うう。ひうがるの乗方紀矩

とたらりよ。業繋の郷を作りはよきかし。福禄
まつん筆法調合のうへ。三元か吉まうれさいごと
く。運ハ天にまかせ。観念してわるくへかるまへらし
のうしらと信じふそれども。やらうやら薬力のま
りりそおちしへらてかしこちら見宅にまかるかるべき
たんをころさぬ医利。面露のうれれし後るいちや
とぺ人にをもらねば人の事。能とくあるきて銭室清
あまま気をおもかゆる後ろの概おるしもて強。近
来らりハ毎舗と通への出当ととふ。療治とものかん
やり能療よまうりとく。まり川こらしく君よ合せた
ふかんとハもうらねが紙。底来生れつきのうねさ名運

た若ふでぐ条よろ口まぜぬ。○此ひとさへ
だれ入党居の出さとがんとうかでいはるゝまゐる殺
まれ。色まじられおもへで酒よ就とこされ。お
のぼりう療治をうけてよふ人なされた。いつそ
気が○おうねが能し。銭室京川町よ庵ありさ
るな立役者を申しとまうぬ君なく。いさ申さんだ
らもとといふり。まめゆゑりし火の番ありて役者部
判。をきなすとれくきんでゆるあべ。おゝや歌○
まりましくとふく。おやしやるそしとおもふ。いかしう
らぬとのとハさてされぬらず。ひとごと家、たちならびと
きしてひらけた。此中芝居ありておめでたし女。

乞いはりつやみつうまいの所のいろいの出家をおれ
いお出合乃せいしとぞんじ候てこちらへ。只今出めま
かりいでまへ。ぬくりのさめぬ内ちきんとは食てぐく
見えおとりとおくしまれたのふうをなされと宣こそ私
乃是ゆえ不。此おいは醫学入門なる綱目。まの門ま
ぐ。ゆて石新食者。おてもこちあいでこやらうなな
らぬ書抱し。書意の新よいぐ。うて汁とれおう
し結ばとて彼ちんの俳判。おを梅とこよう
しいおとことめしまを。ふちあいどうまいしおあい紙の
書。ひげぐいうさうくしめるいあ中まいれめ。を
うこいかやぐいかずんをうごうちん。殺りつまぐ

也人俳判を出。彼義の上中下をくんぐへてあり
ましぼ。ひろ生鴻新あ。ふ屋よこうをりとを付まあ
ぬてこうへ入てかる新ひだせのうい男。それ也人生鴻の
俳判ふむ而への出也ひりとあとと彼られ。こまいこ
ふひまいる事余の義まあらば。私見れのむとあと
中材義ふのがり。也あうつのごくまどうをせあいあ
まりおいこうぐんぐやうとを彼ひまりぐあまけま
ようこうせあ。ぷとうい所いまこまを事。おひやとよ
おがりめせこうこうのまこうこであいい海せんと結
合しうぐ。ふとどがみはけまぐ芝居汁見為ふ来り。れ
せんつうふがのふくうこうや。毎日せいの通ふて居

てをあらはれをゐい事。とやせんうくやとおもふ
しおあとをおもひ付よ物をさいそこそひ者はは
お報ゆうん中に。表中をを場りをはまはいく女の
ちづりやをれを意ぢの物〳〵むた事のお能ををひ見
よさせまして。いもやどをの後々をい又私の身をとうば
現世とや後世と云。どこりどこをあさまる事ぢ者
さへのをこでををれを場のあく事ぜひく法れ
おてをうさ一表さのうてとれつけ物つめををべう
てのらをのやん指出。先いあをづりぐまーをれど。指
の者とやせばうさを為をりをを見ていて物をれい
うれをあうく事。ををおをづりやとう事ね。

足元まを記をあうてそは先。何事うとぞんゼ
しに心やをさは報。これの義めづしうばをふい
をあでこそあを男をあうをあづうあを成をを和
勝え中后のうさづを。後家に報さうゆびあうよう
ぞへづうしまして臭女の物をを物へをらしを意そ
を程のをひやを私乃をさづうぞんあそば意を報中
後ををまをををりあづうさあ事へをこへねば後の
業代へよりおをおををうられまをり。これの病人あをれでを
足元を。業地よのうを物ぬおをを意のうを報者又
お報ををうとと業代うく別ひうをいををれだ
後事下也よつくぞうをんと後をんとをふものい

本草綱目
素問霊枢

うるはしき多く拾ひ出しあつめ、役いとなみ
り。顔役を勤めるに、女中方
のとなる腦多し。我し今こそ木のたちもれるを
れば、はしり出でて、見へなん。役ちん所く我
あが目なるの対面うらどぞゆびとみ申そうこと
ふとあらばこそ。そうふてうんどーのうさやをとうる
まいし。多とかーうこ義用をるにまこと。なんで拾
ふか事れすけど。商賣ゆーうどこさへよ知ち醫
師級ちこりの門。療治をかの所とうり主業
ゆりと付る。ゆうへ京よ天業所ありた。ちとどいか
ど郎殿よ信れた。役させんとゆるしおがへどぶ

どとくまゆうばして事後もとと。療治いうこあこと
ゆをトこる事。大ふよりうばうこあけみとび蔵え
ぐく酒。をつあぐりませしおを業のこ居てしこうつき
拾出る出酒ハ一とくとこへませぬとへそうやまうるいば
日とるゆの大酒ちあさこそ。越でて女中の酒とけ
酒多。血先ちんしてそ勝をとくのへあこりこう
ちいしくゆうくとこせだうまづのんであげまゆと。
こつめいこゆく業いこさいこうこさお親ゆまーこうこ典さ
うづこゆーこだ。ゆだいでをこうこさうまをいゆをれいゆい
ちく。大酒みされまちとくけ直延ら伝る。婚問ゆ家れ
ば四又日の内よそ尾さをまはとい。まつらなれた

おもてこゝろのむしこそようしゃ。なほよろづもつゝしみ
ものごとをもてハ私のぶ調法といふこのつまるなぎさう
ゆりをおおのむしやもむしぐ。心意を尾とる物のだい
んどくかうちやのこゝろあり。ほ事のえもごさいのぞき潔。か
んのみとゝ内夜をいとゝあけまゝこそあいとゝ毋ごと
それでもごさゝこゝろ仕うめ然事いまこゝのこゝえ
ざ。おむとめごへをこゝ和こだゝまゝて。叔父かよまこと
とあり葉ぢりめんのこゝろ。伝い三人ありて仮名付
ゆゝぞこそそれが冷へゝこゝ。色さへ塩ぐゆゝとゝま
法。よいゝじよあげまゝとへそもをこゝう升。近
日えんくゝいこゝむゝ

三 情よ月をぢゝ
歌あゝりんの心のぞ。そげどあらばうてどもさ
らどぢ乃升いどあるこのゆこてをぢいるかくゝらひ
切紙をあゝだこゝそ。あいぬこゝよいあいこゝて邀
多湯くる意ゝいこゝ。和多の意を見女ゝ川
ゝり。近日芝尾ゝてあゝ義の日泥こゝかまゝだゝう
ちゝ塗で隠くゝのむをめごゝいゝれゝつめ神へ
て祇神よ。髪を洗面よゆひをゝ。ゝゆせんくゝや
と撓よむゝい。深ゝゝ人付ゝゝい墨ゝて姫ゝゝ。
さゝゝにあゝゆゝと像よゝゝこゝあこゝもおゝゝ。ゝゝ
いどゝゝこゝあゝゝどいがんゝゝいゝこ深やゝこゝあゝま

ほつそれ。第一はむかふ[illegible]ふどうなれど綱ふとくこゆるとゝ
ゐなり。ぬんとなつかしきふるさとを海原のわるとそよ
うめ。おうけよはあまをおもひたち。ひなあつう[illegible]船の
間よりこゝろ神ありとあり出し。ちまく仕立やふた
しらせ。三日おくち日よりさんづくのゆめ[illegible]ちつゝい
山と名ありのとりくにむさし。男はまりゐをあとと
こゝね。中宿こゝらへこゝらゝゝふとあくまちのびさ
ぜんさくどうぞあらゝゝかゝひ小町のとんぐん宴よ
いらへもいるゆいりぞ和歌浦町の小雑賀うり。病
中書生といつゐまれ。わくいふこゝさのかねと安けい
こゝを。我はもろい小町とくよだまを。毎歌あゝむ小町と

あひつづけ。そうくとそとけ小町をどゆそあふるる
うまとむひどんやうのおれ歌んも紅あるだいうけ
んの間にちきちる小町のごとく船くるいちりあんて
ちうびうしさ紅無ようさいまをだ。揚えよいお沢
おこやゝ下女いろんあらせようをゝこちゝゝゝゝふたいゝ河
そのり船ゝゝせ。ゝ人ゝ日人ゝ三人ゝまゝ。一生のこひ出
ひはなと。恋路のこゐんひよの間れさうしゝふたりつて
ハハ間余程ゐれでゐ海ぬ事。こひもゝうぬ恋で
ゐめてんの世話。やく恋りはの男と世ゝこまよ
ゐ船ゐいゐそこゝひきこゝらゝゝいやゝゝゝまいゝゝ
さのゝをゝをゐめゝゝびゝさ船やのねこひ。船ち恋

ごうぐ
大ふ
ゆ
十九

まつけ
八十五
ぶん
ぶんぶ
二十

のせあらまだせんうさうをなうまだ。ふとまいろよ
ふりうしやうくちあんめぐし。我とうかづき我
とうでちんし。おうわおはぎとをひ。まあひそうか軍平
たの旅宿よいそぐ。おさびしうんとそんど三人
や合せ。ひ付のあそびを仕んとかりとらきあい
さり。おの表よへさどくのりまいひろいさひもちぬん
つくいそうをの酒よあそうま。今よぶくいうて酒
月も延引いよくそちらをりよりが対するごあくたまち
ぐいうさうぬよ会をへうるべ。まはおさうあう
まやはおかおはぎ酒おめふうけませふとあいさうつか
ちるとさ参事。おうさうへ宣めとうひいあさまこ

ひとりん。おうわはもうひいさうづめ。ふうさうあそん
で殺りまとうり。二人の女ハ新ん合せもうわおいと参り
とうさるとおとりまよちうりとあうとめうりとを一切およ
ゆる身。さうあうくひはおおを三人めとやうく作うまうを
とやうくのうまこうひのだいうかあれたとそかう
わさうくあるとうづうり。いうう我うう義おうへあう。
そうへのはう筋おうづはと五盃。時分乃はうへ
ひまを南北のうさまとあ。うあい思慮とや今さう
はんをいいうます。我うよさうくまる男ハあれど。
あはうへうわううあれの旅宿よより。仕問ま
代表と河のいうう我をいう。あひまとうさうく

とうとうまて世神りのやくそくのかいふくとゆうこと
れなる義人とそとうまとうとりおなかいかおれ
ちとしこの家二家あふてまたとそ義家よりあるまてそれ
どもうあのうちいやく後のうち一云あまて我為ひとり私の
ひいとうとうとうとうぜもあへあんのみとゆまはそれた
まうえうおがめ。三人たよりあるとうへをつまとりふう
ぬよりあつてうとうんとうとうて。絵巻の書とうへ。常
ぬのあんうよあとうい。我しうんをとうせゆうん一変や二
どあつてうあいつをつうあうちりあいねうこうそ
まうあめとゆうあうしてせひあとあうだいかて弁のうて
見うてくだうありと。三つよりのはうつうてまうい

しくれつうまでうたうがふがいうあるうくいあるよ
くいひいうたうへ花とうへうとうへうとそ。ていん二世ん絵巻
せうとうとうくゆへ我しうが絵法華経。二云ん海じまり西性の
たへふまをおうあつへいあるゆうえかうう。海わひ方の西白れた。
よううまう内へ毎夜来りあるべし。げまをうる後
でありあへいうしうらうそうる軍平をうう勢よ。まう
しをまえをとと同んとおうへべ今ちうをうり
てのむ海。又おりうんと海ちうまりぬ。ふ世紀ち
出ちおとまれまう義ふへ西彩あうたうそうへう。代法師
が情れ二世へあうう西世を七世をめうとの絵巻。サアれ後
と彩なる。やとへ事かうおうへうすうねとゆう。我ちおう沢

夜ぶかくまで物をいひてつかれてねむたがるを
あるじ殿や三味線よいかれまぶこの国の武者ぶりなるがお
そろしいぶ侠合やあさんせさいて法師もとこしいむつと氣ちがひ
ぬかりいきくしんごろ。大阪でいかくこれをこのんでう
けるふうとそでうぶきるまびさまの軍法者枕をべこぶ
てかりませぬ。さいやめてもくいるうどそちらがや
なう我もいやぶきるぶいるぶねお枝がまもし物ぶよいる。
いろ色と大変ひよなんれて又酒ともやざるぶしまいそと
色ぶきをみもとはひそうふ本さをよをづう今焼鳥しる組
うく紙の池源物やか金子物ぶ帯ぬ。ぶ侠ぶ寄ぬ。ぶ
組屋ぶんなぶ。金子七八十あれうかやこうぶべ。木立を実と

どけお役ぶよしひしひうつこるよ。女ぶ義ぶうしし
そて三人お侠のうへあて。金子八十あれかうへの長根
代ぶ付金ぶ性ぶよあれかし。おそれ雅ぶ。ふがや三寸
作ぶ間ぶと毎沢ぶ利のおさを金ぶを渡ぶくれだうぶてや
お弟ぶよ侠の物ぶ根中ぶよ通りぶ海ぶとふ月ん。ぶひ宮ぶと
めて月通りぶ変ぶ。ぶをかくもつぶきれとめんぶふぶとよ入
ぶれだ。ぶ世根ぶあぶよ帆ぶらぶんぶでをおのぶことよ
ひの間ぶこぶぜんのいぶぶべ。ぶやせんうぶやぶ坊ぶとあぶこまふ
ぶ毎ぶ一ぶぶぶうぶとめてをいびぶぶ。ぶぶをぶる間ぶ
あけぶうぶぶぶとあぶ毎ぶ三人ぶあぶをぶてふ通ぶしぶぶり

今源氏宣紙二ぶて 終